

Pissarro

TEXT BY JOHN REWALD



122 REPRODUCTIONS

WITH 48 IN LARGE FULL COLOR

禁無断転載

本書の著作権は Harry N. Abrams Inc.,
New York にあり日本における独占版権は
美術出版社に帰属します (1968. 10)

①

PISSARRO

(日 本 語 版)

1968. 10. 20 初版

1990. 6. 10 11版

解 説 JOHN REWALD

訳 者 平 沢 悦 郎

発 行 者 大 下 敦

本 文 印 刷 東京グラビヤ印刷株式会社
株式会社理想社印刷所

原 色 版 印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

発 行 所 株式会社 美術出版社

東京都千代田区神田神保町 2-36 稲岡ビル 6 階

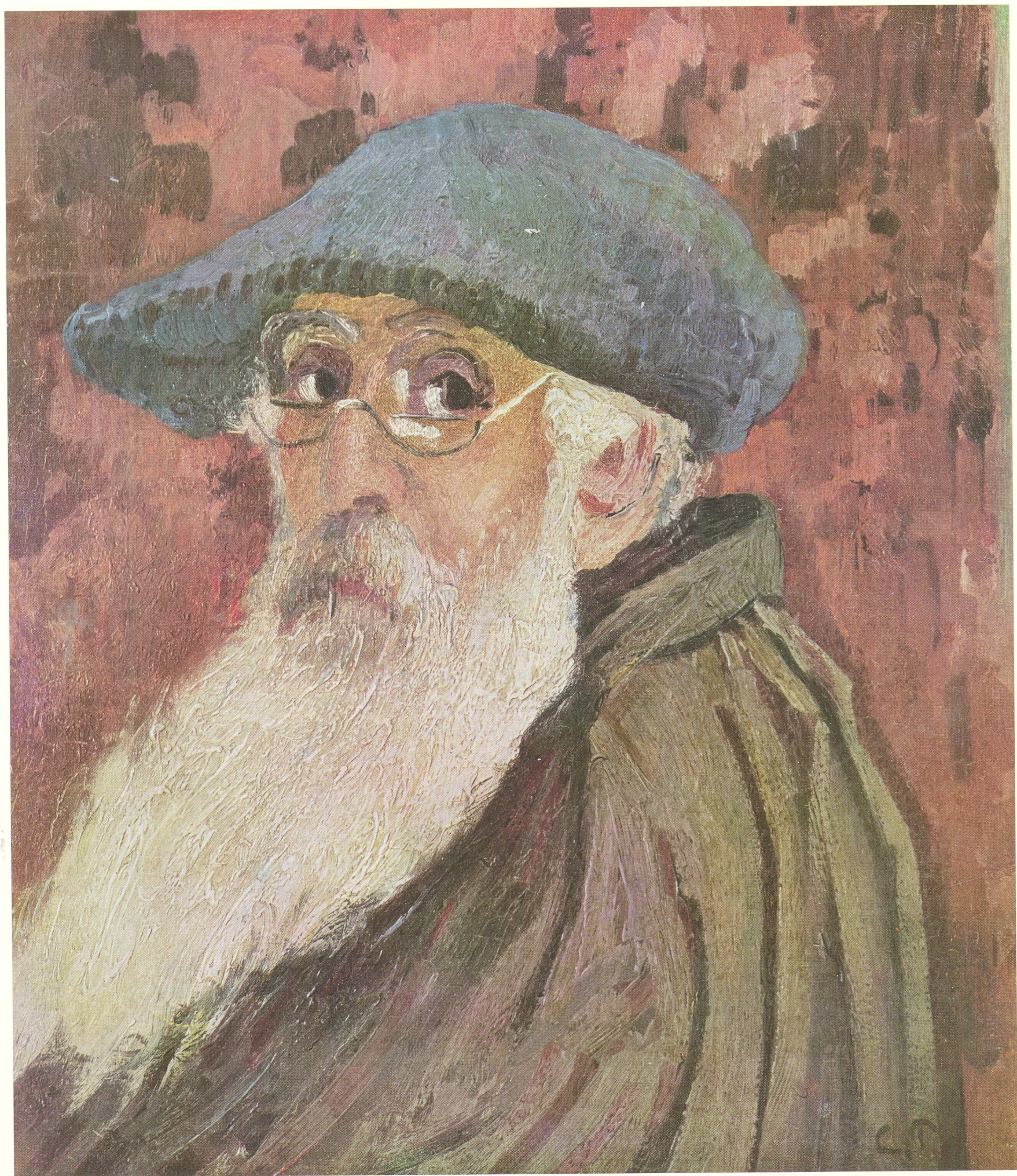
TEL (234) 2151 (代) 板替東京 5-166700

郵便番号 101

Printed in Japan

ISBN4-568-16015-4 C3371

PISSARRO



C A M I L L E

PISSARRO

JOHN REWALD

平沢悦郎訳

美術出版社

PISSARRO: text by JOHN REWALD

All rights reserved in all countries by Harry N. Abrams
Inc., publishers, New York

Japanese copyright © 1968 by Bijutsu Shuppan-sha, Tokyo

目 次

カミーユ・ピサロ	ジョン・リオルド	9
略年譜		46
デッサン・版画・水彩		49
図版解説		
自画像 1898 年頃		2
ポントワーズの埠頭と橋 1867 年		66
静物 1867 年		68
ポントワーズ近くのジャレーの丘 1867 年		70
サン＝ジェルマンへの道, ルーヴシェンヌ 1870 年		72
ルーヴシェンヌ, ヴェルサイユへの道 1870 年		74
ロクンクールへの道 1871 年		76
ルーヴシェンヌの雪 1872 年		78
ボワザン村の入口 1872 年		80
ルーヴシェンヌの栗の木 1872 年		82
ミネットの肖像 1872 年頃		84
花を持つジャンヌの肖像 1872 年		86
ポントワーズ, 冬のジゾールへの道 1873 年		88
花束 1873 年		90
自画像 1873 年		92
ポントワーズ近くのオワーズ河 1873 年		94
積礫, ポントワーズ 1873 年		96
レルミタージュ通り, ポントワーズ 1874 年		98
ポントワーズ近くの石切場 1874 年頃		100
レルミタージュの坂道, ポントワーズ 1875 年		102
モンフーコーの収穫, ブルターニュ 1876 年		104
花咲く果樹園, 春, ポントワーズ 1877 年		106
赤い屋根, 冬の村の眺め 1877 年		108

ポントワーズの公園 1878 年	110
ポントワーズ近くの山腹の道 1879 年	112
ポントワーズの街景 1879 年	114
シャボンヴァル風景 1880 年	116
ラ・メール・ラルシュヴェク 1880 年	118
棒きれを持つ農家の娘 1881 年	120
農婦 1881 年	122
リンゴ拾い 1881 年	124
朝のコーヒーを入れる百姓娘 1881 年	126
フェリックスの肖像 1881 年	128
井戸端の女と子供 1882 年	130
若い田舎の女中 1882 年	132
豚肉屋、マーケット風景 1883 年	134
ルーアン寺院 1883 年	136
ラクロワ島、ルーアン、霧の効果 1888 年	138
森の浴女 1895 年	140
ルーアンの大橋 1896 年	142
曇り日の古いルーアンの屋根（寺院） 1896 年	144
若い女中 1896 年	146
イタリア人街の大通り、パリ、晴れた朝 1897 年	148
テアトル・フランセー広場、雨のバリ（オペラ座通り） 1898 年	150
レビセリー街、ルーアン、曇り日の朝 1898 年	152
セーヌ河とボン・デ・ザール、パリ 1901 年	154
サン＝ジャック教会、ディエップ、雨の日の朝 1901 年	156
ボン・ロワイアルとバヴィヨン・ド・フロール、パリ 1903 年	158
参考文献	161

亡きわが友

リュドヴィク＝ロド・ピサロ

リュシアンおよびエステル・ピサロ

に捧ぐ

P. Pissarro.

人間性の燈台に捧げた賞賛すべき詩（訳者注：「悪の華」収録）のなかで、ボードレールは、ルーベンス、レオナルド、レンブラント、ミケランジェロ、ピュジェ、ワトー、ゴヤ、ドラクロワたちの天才をたたえている。しかし偉大な業績の歴史は、このような高く聳える巨匠たちによってのみ成立つものではない。歴史は無限の連鎖である。大きな環が小さい環につらなる如く、無名の芸術家からやや知られている芸術家につらなり、さらに輝かしき後継者にひきつがれ、前者の業績が一段と更新され発展させられていくのである。芸術作品の不断の更新において、19世紀フランスの発展ほど魅力的で活気に満ちたものはほとんどない。この時代は、ボードレールが「悪の華」を著わしたまさにその頃静かに開始されていた。が、やがて近代美術の巨匠の幾人かが現われることとなった。その世紀の中葉まで、これらの巨匠たちは努力し、意見を衝突させ、業績をあげ、世間から否定されながら、力強くも同時に人々を混乱させる驚くべき絵画を世に送り出すこととなった。その中から、印象派の名のもとに今日よく知られている新しい絵画様式が現われたのである。

カミーユ・ピサロは、年長者というだけでなく、知恵のあることと、調和のとれた温和な性質とで、まとめ役にふさわしか

った。はじめ、印象派の代表者はマネであり、彼はピサロより二つ年下であった。ピサロは、代表者となる野心もなく、気をつけて目立つ振舞をしないようにしていたが、しかし論争・喧嘩・誤解のおさまらない時には、小さな鬱憤や偏見または傷つけられた誇りなどにこだわらず、皆を芸術の目的に集中させう



リュシアン・ピサロ：制作中のカミーユ・ピサロ 1885年頃
コンテ・クレオン オロヴィダ・C. ピサロ嬢蔵、ロンドン



セント・トマス港 著者撮影

る唯一の人物であったように思われる。彼らの追求したことは、各自の物の見方や、自然の見方を表現しうる可能な表現形式を発展させることであり、言いかえれば、表現の自由を主張することであった。しかし、もしピサロが仲間に尊敬され、賞賛される優れた謙虚な画家でなかったならば、彼らに優しい感化を与えることはできなかったであろう。彼が初めに偉大な先駆者の教えを身につけ、新しい考えを受け入れることを常に心がけ、独創性や見込みがあると思った人々を励まし、さらにその上次の世代の人々と一緒になって力をあわせたからこそ、彼は中心的な立場にたつこととなったのである。同時に誤りを率直に認め、作品の完成に探究を重ね、型にはまらず、賞賛に値する新鮮な物の見方、純粋な心を最後まで失わなかった。

ピサロは1830年7月10日、当時デンマーク領であったセント・トマスのヴァジン島で、かなり繁昌していた商人の息子として生まれた。父は、その島の首都で、活気ある、絵のように美しい小さな港町、シャルロッテ・アマリーからほど近い所に雑貨店を開いていた。1799年、祖父のジョセフ・ピサロはボルドーに生まれ、その親はスペイン系のユダヤ人であった。一家は何代か前からボルドーの近くに住んでいた。ジョセフ・ピサロは、フランス革命で亡命した若いパリ娘アンヌ・フェリシテ・プティと結婚した。数年後、彼は妻と子供たちと義弟のイサク・プティを伴ってフランスを去り、セント・トマスに赴きそこで定住した。この地でイサク・プティは、エスター・マン

ザーノ=ポミエとラシエル・マンザーノ=ポミエという姉妹と、先に姉、次いで妹とそれぞれ結婚した。彼女たちは当時フランス領だったドミニカ島の生まれてスペイン人であった。夫の死後、未亡人のラシエルは、ジョセフ・ピサロとアンヌ・フェリシテ・プティの子供で、自分の甥にあたるアブラハム・ガブリエル・ピサロと1826年に再婚した。アブラハムは、両親がヴァジン島にたつ前、1802年にボルドーで生まれていて、叔母であって妻になったラシエルより7歳年下であった。アブラハムとラシエルの間には息子が4人生まれ、末子のピサロの洗礼名はヤコブと名づけられた。

環境の関係で、ピサロは子供の時から数カ国語に慣れていた。すなわち両親の関係でフランス語を、また島の黒人によってスペイン語と英語とを話した。(彼はセント・トマスの公用語であるデンマーク語は話さなかったらしい。)両親は、ピサロがフランスと接触することを強く望んでいたもので、彼をパリにやることにした。12歳の時、ピサロはパリの小さな寄宿舎のある学校で学び始めた。画家気取りの校長が美術に対するピサロの好みを大いに励ました。5年後ピサロが帰郷することになった時、校長はピサロに「やしの木を描いて熱帯の生活を絵画に生かすよう」熱心にすすめた。ピサロはその助言を几帳面に守った。

ピサロがセント・トマスに帰ったのは17歳の時で、彼は父の店の事務員になった。店は家族が住んでいる生家の一階にあった。彼は仕事に対して全く関心がなかったが、しかし彼が後で認めているように、かなりの給料を与えられた。彼は暇な時いつもスケッチに専念した。やしの木や、他のエキゾチックな植物だけでなく、身の回りの日常生活などもスケッチした。陽の当たる場所にいるロバにひかれた荷馬車、浜辺で洗濯したり水差しやかごや包みを頭にのせて運ぶ黒人の女たちを、何度も描いた。これらの写生画において、ピサロは純真で誠実な観察者であることを示している。

彼は、父の指図で着荷を管理するため港に行く時は、いつもスケッチブックを手にして出かけた。荷揚げされる箱や木枠を記録しながら、帆船が青い海を滑るように進み、草でおおわれた大きな岩が浜辺に沿い、その頂上にデンマーク風の城が建っている活気ある港の景色を写生していた。ようやく才能を発揮しかけたピサロではあるが、しかし5年間はこのような日々の雑務と天分のうずきとの間をさ迷っていた。彼は両親から絵画に没頭することを許されなかったので、ついに書き置きを残して家をとび出した。港でスケッチ中に知合ったフリッツ・メルビイと一緒に、海路ベネズエラに向った。メルビイはコペンハ

ーゲンから来ていたデンマーク人の画家であった。「市民生活の束縛をのがれるためにカラカスへ脱出した」とピサロは後に述べている。メルビイは彼に絵具の使い方を手ほどきした。ピサロの最初の油絵と水彩は、ベネズエラで描かれた。この地で彼はまた鉛筆、インキ、単彩などによるデッサンを、数え切れないほど数多く描いた。この頃の多くの絵は、まだスペイン語で日付が入れられ、かつ書き込みがなされていて、署名も Pizarro と記されていた。

ピサロの両親も、遂に彼が画家となるのを運命と考えて、彼がフランスに帰って絵画に没頭するのを許した。このようにして 1855 年の秋、ピサロはパリに帰り、折しも万国大博覧会に遭遇したのである。そこには多くの国の画家の何千という絵が陳列されていたが、さまざまな流派の絵の大部分は、伝統的な画法と成功しやすい安全な方法を踏襲していた。ピサロはしかし、アカデミックな公式から脱皮しようとしているごくわずかな画家たちに着目した。彼はクールベ、ドービニー、ミレー、コ



熱帯風景 パリで描く 1856年 カンヴァスに油彩
個人蔵。ワシントン

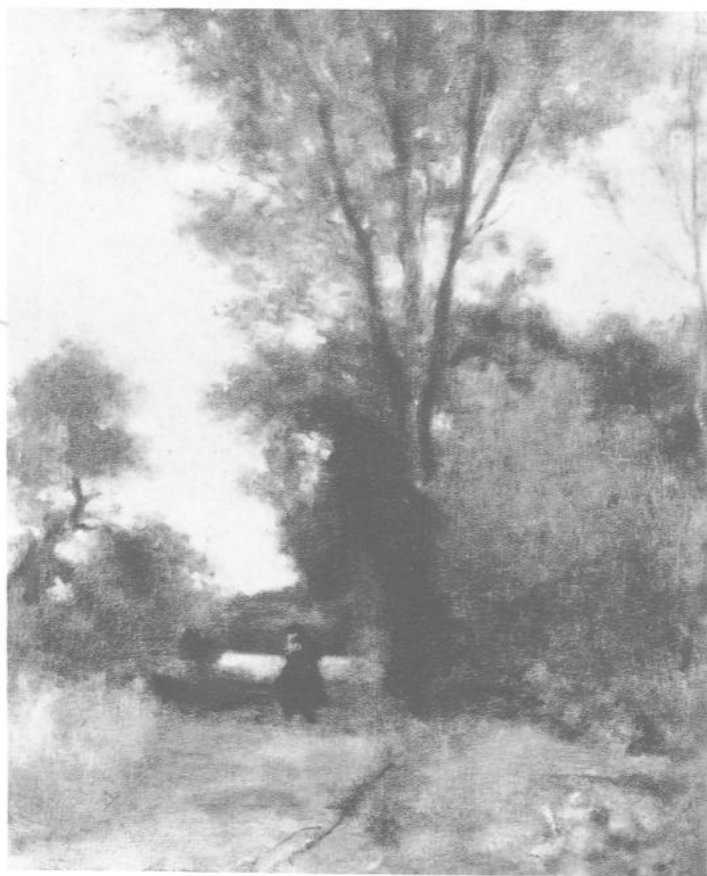


しゅろの樹 ベネズエラ当時のデッサン 1853年
鉛筆 リュドヴィク・ロドルフ・ピサロ旧蔵。パリ

ローの絵に感銘をうけた。そして親切にも自分を認めて適宜に助言を申し出てくれた कोरोには、進んで指導をうけに行った。(ピサロはドラクロワにはほとんど魅せられなかったらしい。ドラクロワの弟子の シャッセリオの父がセント・トマスのフランス総督でピサロの父と交渉があったが、そのシャッセリオには近づこうとしなかった。)

ピサロはフリッツ・メルビイの弟のアントンとも親しくなっており、一緒に描き始めた。アントンはパリに住んでいて、当時有名な海洋画家であった。ピサロがフランスで描いた最初の絵は、因襲的な観念のために、彼の異国的な主題に対する親密さがほとんど表われていないが、西印度諸島とベネズエラの印象をなお伝えている。しかし、やがてピサロはこれらの懐古的な絵に背を向け、彼の周囲の世界、彼にとって全く新しいものでもないが、しかし彼がかつて住んでいたセント・トマスの環境と比較してはるかに魅力のある生活を研究することとなった。当時パリの学校やアトリエで吹きすさんでいたあのアカデミズム対ロマンティシズム、理想主義対現実主義の論争に加わることとなったのである。

彼の才能が発揮できるよう正規の勉学を望んでいた父を満足させるため、ピサロは何人かのアカデミックな教師たちの教室に通ったらしいが、そこでは生きたモデルを描くことができ



風景 1860年頃 カンヴァスに油彩
ジョン・バートン博士蔵、ロンドン



道 1864年頃 カンヴァスに油彩
ゴードン・ポロック蔵、ニューヨーク

た。しかしこれらの教師たちの平凡な授業、息苦しい講座の雰囲気は彼をして、どこか他の教授に急いてつく必要を思わせた。かつて特にカラーをえらんで賞賛させた同じ純真な新参者の本能は、ここでもまた独自の表現に向って第一歩をふみ出すよう彼をみちびいたのである。ピサロは、カラーの純真さと自然に対する詩的解釈に心を動かされ、またミレーの田園生活についての感傷的ではあるが率直な表現にも同じように心を奪われ、さらにクールベの絵の真実を目指すほとんど野獣のような荒々しい表現にはもっとも心を打たれた。若いピサロに感銘を与えた画家たちの中で、クールベは最も声高く最も烈しく論議された人物だった。

当時クールベは、アカデミックな専制が自然に発露する自発性を抑制させようとしたり、自然とのあらゆる親しい接触を止めさせようとしているのに対して、日常の真実に帰れと闘いの声をあげていたのだった。またフォンテンブローの静かな隠れ家で描いていたカラーとバルビゾン派の画家たちも、自由な眼で自然を表現しようと努力していたが、しかし対象を忠実に描

写するというより、しばしば自然の印象を総合して描いていた。彼らの態度はクールベほど先鋭的でなかったが、しかし当時流行の伝統的な教えに完全に対立していた。その教えによれば、風景は高貴に理想化して表現され、「画家は自然のもっとも美しいもっとも偉大な光景を選んで絵を構成し、その中に見るものの興味を大いに刺激するような人物の行為を導入して見るものの情操を高め、想像力を高遠にしなければならない」とされた。これに対してクールベは、自然の美というものは文学や情緒的な靈感で昇華する必要は全くなく、見る人に直接訴えるよう力強く、正直に、自然を表現すべきである、と宣言した。

クールベの立場は、因襲にとらわれない若い世代のほとんどの画家たちをひきつけた。しかし、それが特に当時のはっきりした傾向であったというのではけっしてない。たとえばクールベの友人だったボードレールは、1855年フォンテンブロー派についての評論の寄稿を友人の詩人に頼まれた時、次のように答えている。

「君がたずねているのは……自然を主題とした詩についてな

のだろうか。むろん、森について、大きな檜の木、新緑、昆虫についてなのだろうが。しかし君は私が植物に心を動かされないことや、あの独特の新しい信仰に反抗していることをよく知っている。あの新しい信仰は、あらゆる精神的存在に衝撃を与えずして叙述するには何か難しいように思われる。私は神の靈魂が植物に宿るとは信じない。たとえ靈魂がそこに宿るとしても、私はある程度関心をもつだけで、聖化された植物の靈魂より私自身の魂の方がずっと価値があると思っている。私はいまでもなお繁茂し若返った自然の中に、気味の悪いなにか言葉に表わせないもの、息苦しい激しい残忍なものがあると思っている。鬱蒼とした森林地帯に……教会や寺院のアーチに似た森の

緑門の下で……、私は驚くべきわれわれの都市を想いおこすのだ。そして頂上から流れ出る巨大な音楽は、私には人間の嘆きの声の演奏かと思われるのである。」

これが、当時若いピサロの前にたちはだかった状況であった。彼はもっとも抵抗の少ない方法を選び、伝統にしたがって、イメージを「高尚化しつつ」創造する目的で自然を研究し、またクールベやコロローや、その他どんな逸話的偏見ももたずに絵画的発想の源泉を直接自然の中に見出すすべての人々にしたがった。あるいはまた自然を離れて、人間とその豊かな心を探究したりもした。その頃産業革命がおこり、人間性に対するあらたな可能性が開かれようとしていたのである。



マルヌ河のほとりの道 ラ・ヴァランヌ=サン=イレール付近 1864年 カンヴァスに油彩 メリーランド・インスティテュート (G. A. ルカス・コレクション)、バルティモア美術館へ貸与



ラ・ロシュ=ギヨン付近での驢馬乗り 1864-65年 カンヴァスに油彩 ロベルト・フォン・ヒルシュ蔵、バーゼル

ピサロはあまり永くためらってもいなかったようだ。彼がそれまで描いたものがどのようなものであれ、また彼の作品が初めたとえどのように個性に乏しくとも、自然を謙虚に凝視することによってのみ、自分に与えられた天賦の才能が発揮できると知っていたはずである。パリにきて友人とアトリエを共有していたが、田舎に出て描く必要をみとめた彼は、1年以内でそこを去ることにした。1859年、初めてサロンに入選した時、彼は森で有名なポントワーズ近くのモンモラシーから風景画を出品していた。カタログには「A. メルビイの弟子」と署名した。その後まもなく伝統的風景画の因襲的方法を彼がやめたことは、1861年と1863年の二つのサロンに落選したことによっても明らかである。(有名な落選展覧会で特記されるこの1863年以後のサロンは、毎年開催された。)ピサロは落選展覧会に出品した人々の中でも特にアカデミックな審査員の要求に妥協せず、代りにクールベや、若い新参者のマネの周囲に集まる異端者たちと公然と交わった。

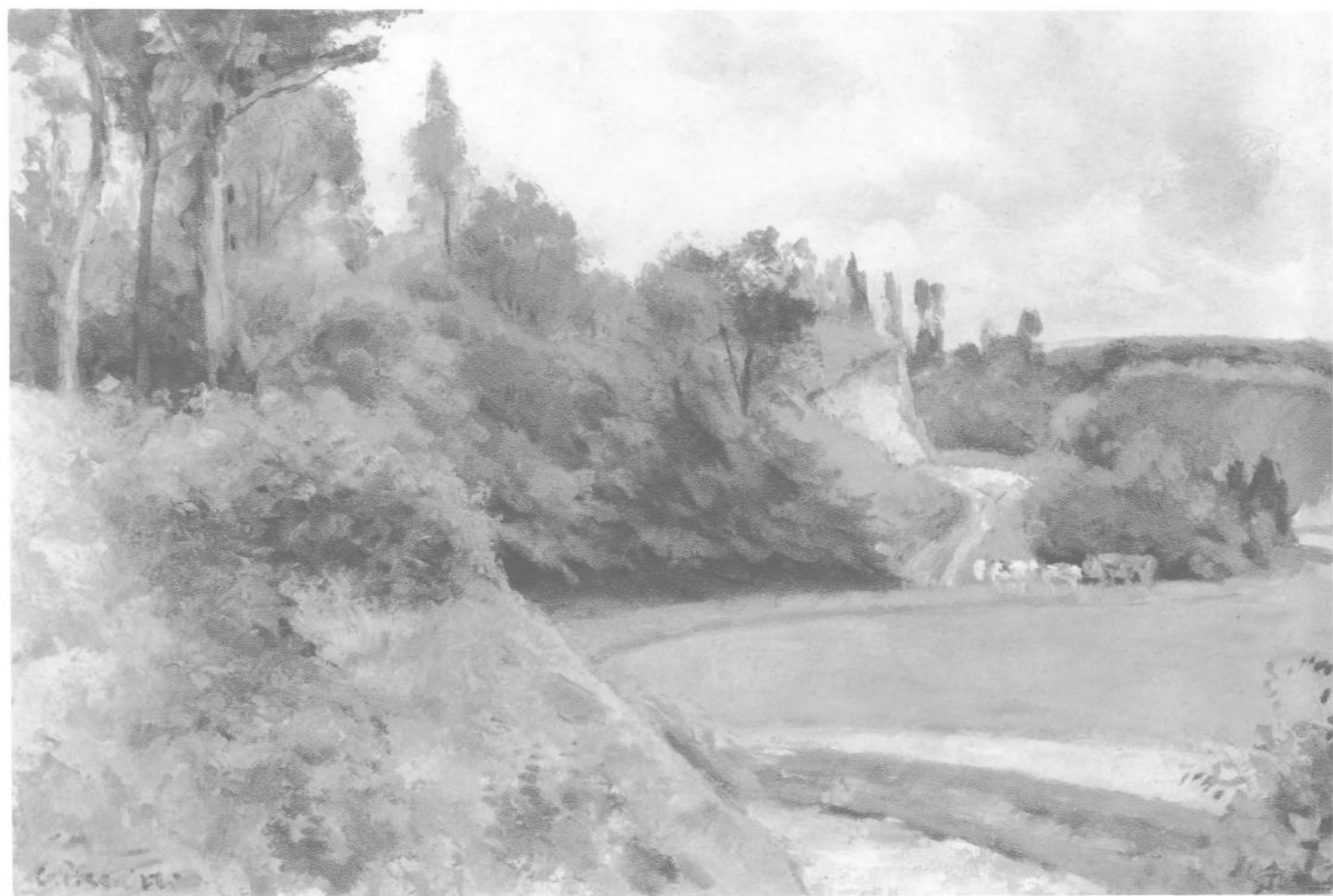
すでに名をなしていたマネにしてみれば、審査の偏見に屈服するよりは抗議の展覧会に参加するほか仕方がなかったのだが、ピサロはしかし目下のところまず自分の名声をあげなければならない無名の初心者であった。彼が非常に勇敢に自己の独立性を主張したということは、前途に横たわる困難にもかかわらず、いかに早く彼が追求しようとした道をたどっていたかを示している。そのことはまた、芸術家として温和な態度と思慮分別をもちつつ、しかし原則の問題に関しては確乎とした態度でゆずらなかったことも示している。サロンの審査が全く不都合な制度であり、そのかたよった審査がすべての自由な表現を危くする以上、たとえ今後悲惨な排斥を招くかも知れないとはいえ、取りうる立場はただひとつであった。ピサロはためらわず態度をきめ、ちょうど晩年にあるもののように謙虚な態度で、その立場にたち、好運を期待せず、自分の意図に忠実にしたがった。そしてこのことは、彼がマネのような自立的手段をもっていなかったが故に、特に賞められるべきであった。マネ

に反して彼は貧しかったから、自活すべき責任を負わされており、両親のどんな援助をもたち切られることが予想されていた。

ピサロの両親は、ピサロがフランスに到着した2,3年後にセント・トマスを去っている。商売を管理人に委せて彼らもまたパリに定住していたのである。パリで彼の母は、1838年にブルガンディで生まれたジュリ・ヴェレーという若い召使いを雇っていた。彼女はピサロより8つ年下だった。1863年2月、ピサロと彼女との間に長男リュシアンが生まれた。ピサロの両親は、彼女の身分が低いので、この結婚に悩んだ。父は特に生活の援助を与えることを中止したが、母は時々送金してくれた。ピサロは、パリからほど遠くないマルヌ河の堤のラ・ヴァランヌ=サン=イレールにその小家族を連れて移転し、みずからの手で収入をえて生活しようと一生懸命努力した。ジュリ・ヴェレーは、骨身を惜しまずどんな少しのお金でも稼ぐために、時々野良で収穫の手助けまでしたりした。

落選展覧会の開催される2,3カ月前に子供が生まれているので、ピサロはどうしても成功する必要があったわけだが、幸運が訪れることとならなかった。それでも何人かの情深い批評家たちに認められた画家たちの中には入っていた。しかし、ただそれだけのことであった。新しい傾向の熱心な支持者であるカスタンニュアリから、唯一の励ましの言葉が述べられた。彼は「先のサロン（その時ピサロは落選していた）のカタログに彼の名前がない以上、この画家は若い人だと思う。コローの様式が気に入っているように見える。コローはすぐれた大家である。しかし真似しないように注意しなければならない」と数行書いてピサロを批評した。

事実ピサロは、定期的にコローに会うために出かけたり、彼に絵を見せて意見を求めたりした。コローは、直ちにこの若い画家が骨折っていることを理解して、次のように述べた。「君が芸術家である以上助言は不要である。そのことを承知であえ



風景 1867年頃 カンヴァスに油彩 個人蔵、ロンドン